

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03448

研究課題名（和文）入学試験や定期考査に利用できる英語スピーキングテストシステム構築のための指針策定

研究課題名（英文）Formulation of guidelines for building an English speaking test system that can be used for entrance and term-end examinations

研究代表者

羽藤 由美（Hato, Yumi）

京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

研究者番号：50264677

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,500,000円

研究成果の概要（和文）：下記(1)(2)の実績に基づいて、学校・大学等が入学試験や定期考査において、目的に応じた英語スピーキングテストを開発・運営するためのガイドラインを策定した。また、大学入試に民間試験を用いることの問題点を指摘し、公的機関が質の高いスピーキングテストを開発・運営するための具体的な課題と解決法を明らかにした。

(1)京都工芸繊維大学が独自に開発し学内で定期実施していたコンピュータ(CBT)方式のテストシステムを改良し、2017年より同大学のAO入試に導入した。

(2)受験者と面接官をビデオフォンで結ぶテストシステムを開発し、京都市立京都工芸学院高校の2016年度、2017年度の各学期末考査に導入した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2021年に導入される大学入学共通テストでは、英語4技能（特にスピーキング能力）を評価するために、複数の英語民間試験が使われることになっていた。本研究は、民間試験ではブラックボックスになっている受験から成績返却までのプロセス（作問、問題配信・音声回答回収、採点、等化・標準化、トラブル対応、費用等）を透明化することにより、新制度では入試に求められる公正性・公平性が担保できないことを実績データに基づいて訴えることができた（文科省は制度見直しを導入の直前に決定）。また、スピーキング能力の向上により直接的につながる評価システムやAIの発展を視野に入れた長期的な解決策（対案）を提示することもできた。

研究成果の概要（英文）：Based on the results of (1) and (2) below, we have established guidelines for schools and universities to develop an English speaking test that meets their purposes and operate it in entrance and term-end examinations. We have also pointed out the problems entailed in using commercialized speaking tests for university entrance examinations, and identified specific challenges and solutions for a public sector to develop and operate a high-quality speaking test.

(1)We improved the computer-based test system that was originally developed by Kyoto Institute of Technology and regularly implemented on campus, and introduced it to the AO (admission office) entrance examination of the university from 2017.

(2)We developed a test system that connects the examinee and the interviewer with a videophone, and introduced it to the term-end examinations at Kyoto Municipal Kogakuin High School in the 2016 and 2017 academic year.

研究分野：応用言語学 外国語教育

キーワード：スピーキングテスト 英語 リンガフランカ 大学入試 CBT

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

本研究への科研費助成(基盤研究B)を申請した2015年秋の時点では、当時進行中であった「高大接続改革」の一環としての大学入試改革の行方を占うことは難しい状況であった。2020年度に大学入試センター試験に代わって導入され、2024年度からはCBT化が検討されていた「大学入学希望者学力評価テスト」(後に「大学入学共通テスト」と名称変更)についても不透明な部分が多かった。その中であって、英語については一貫して民間試験の利用が推奨され、「大学入学希望者学力評価テスト」に英語を含めることは計画されていなかった。これは、大学入試において4技能を評価する必要性が広く社会に認識される一方で、大学入試センターがそれまでに実績のないスピーキングテストを開発し、50万人以上の受験生を対象に、入試に求められる公正性・公平性、機密性を担保しながら実施することが、技術的にもコスト面でも難しいと判断されたからであった。また、韓国が巨費(政府発表では39億円)を投じた国家英語能力試験(NEAT)の開発が道半ばで頓挫したことの影響も大きかった。しかしその一方で、外部の民間試験を「大学入学希望者学力評価テスト」の枠内で利用することについては、学習指導要領の形骸化や高額な受験料が招く受験機会の不均衡などを懸念する声が多く聞かれた。

英語の入試をめぐるこのような動きの中で、京都工芸繊維大学(以下、京都工繊大)では、2012年度より、教育担当の副学長、英語教員、アドミッションセンター所属教員、情報工学系の教員らがチームを組み、企業とも連携して、学部や大学院の入試に導入することを目指した、独自のコンピュータ方式(CBT)の英語スピーキングテストの開発に取り組んできた。J-MODEP(The Most Demanding English Program in Japanと名称変更)と名付けた多読多聴プログラム(後に「英語鍛え上げプログラム」と名称変更)で学生を徹底的に鍛えたが、発信能力、特に話す力が伸び悩んだ。この問題を解決する手段の一つとして、学生の70%以上が進学する大学院の入試にスピーキングテストを導入することを考えたのがこの取組の発端であった。しかし、大学固有の問題を解決することは、同時に、上述の日本の入試における英語能力の評価に長く立ちはだかる難題に挑むことでもあった。そのため、本研究の基盤となった「大学入試(個別試験)英語へのスピーキングテスト導入にむけた調査研究」について、2013-15年度の科研費助成(基盤研究C)を申請した際には、これを「京都工繊大が目標達成に挑む過程で必要となる多領域の調査研究や、直面する様々な軋轢・挫折を克明に記録し検証することにより、大学入試全般へのスピーキングテスト導入に向けた課題を明らかにするケーススタディー」と位置づけ、申請が受理された。

2015年度末に完了した同研究では、「リングフランカとしての英語(ELF)」を使う能力を測るという理念に基づくテストスペックを策定した後に、CBTのテスト実施システムとオンラインの採点システムを開発し、2014年度からは学部1年次生全員を対象として定期実施するところまで漕ぎ着けた(2015年1月第1回実施、複数のテスト版を等化するためのアンカー受験者を含めて686名受験:同年12月第2回実施、713名受験)。他の大学が試みたことのない分野に踏み込んで、実際にCBT方式のスピーキングテストを開発・運営した経験から得た知見やデータは貴重である。とりわけ、入試への導入に向けて解決すべき具体的な問題が明らかになったことは大きな収穫であった。

本研究の一義的な目標は、これらの問題を解決して、2017年度実施の京都工繊大A0入試、および、できるだけ早い時期の大学院入試に英語スピーキングテストを導入することであった。さらに、その実績を踏まえて、大学や高校等が入学試験や定期考査に利用できる英語スピーキングテストを構築するためのガイドラインを策定することを発展的な目標と定めた。

### 2. 研究の目的

下記(1)(2)の事業を完遂し、その実績に基づいて、学校・大学等が入学試験や定期考査において、それぞれの教育環境や目的に応じた英語スピーキングテストを開発・実施するためのガイドラインを策定する。また、モデルの規模を広げ、大学入試センター等の公的機関が民間試験に頼らず、4技能を測る大学入試を行うことを想定して、スピーキングセクションを開発・実施するための具体的な課題や解決法を明らかにする。

- (1) 京都工芸繊維大学が独自に開発し、学内で定期実施しているコンピュータ方式(CBT)の英語スピーキングテストシステムを、学部のA0入試や大学院入試に導入できるように改良する。
- (2) 受験者と海外の面接官をビデオフォン(スカイプ等)で結ぶ面接方式のスピーキングテストを定期考査に組み入れるシステムを構築し、京都市立京都工学院高校において実践する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 京都工繊大におけるCBTシステムの改善

上述のテストスペックやテストの実施・採点システムは、2016年度実施の大学院入試への導入を目指して開発したものであったが、以下2つの問題のために目標達成が阻まれた。そのため、本研究では、ハイステークス・テストのモデル構築に向けて、まずはその問題を解決を図った。

- ① 受験環境の公平性確保: 学内テスト実施直後の受験者アンケートでは、回答者509名の34.2%が「他の受験者の回答音声に何らかの影響を受けた」と答え、なかには「他の受験者の回答からヒントを得た」というコメントまで寄せられた。これは、TOEFL、TOEIC SW、GTEC等の民間試験についてもしばしば指摘される問題であるが、公平性に敏感な日本において入試にスピーキングテストを本格導入するとすれば解決は必須と考え、ノイズキャンセラー付ヘッドセットや吸音パーティションの利用等で物理的に解決することを試みた。しかし、費用面で

の汎用性が低いことがわかったので、2017年10月実施の学部A0入試においては、同じ教室の受験者が同一のタイミングで全項目に回答するようにテストの実施システムを改良することにより、この問題を軽減した。

- ②受験者の準備不足解消：上記アンケートの「今後、このようなテストが学内で定期的実施されると、学生全般の英語を話す能力に良い影響を与えると思うか？」という質問には、72.0%が「思う」と答えた。その一方で、「大学院の入試にこのようなテストが導入されるとしたらどう感じるか？」という問いに対しては、「事前に対策できる時間が欲しい」といった建設的な意見に交じり、「死ぬ！」「やめて！」「途方に暮れる」「他大学の大学院を受験する」といった回答も目立った。これらより、スピーキングテストの有効性を実感しながらも、いざ入試となると準備が整っていない学生の実態が明らかになった。この問題の解決に向けて、日頃の教育プログラムに多様なスピーキングテストを組み込むとともに、新生の導入科目や必修科目の授業訪問等を介して、テストの目的や通底する理念、評価観点等を周知徹底した。
- (2)上記②の取組の一環として、高校・大学の定期考査に利用できるビデオフォン(スカイプ)を用いた面接方式のスピーキングテストシステムを開発した(テストスペックを策定し、教室にいる生徒とフィリピンの面接者を結んで1コマ50分でテストを実施し、当日中に採点するシステムを構築した)。ローステークス・テストのモデル構築に向けて、このシステムを京都市立京都工学院高校のフロンティア理数科(1クラス30名×2クラス)の「英語表現 I」(2016年度)、「英語表現 II」(2017年度)の各学期末考査に導入した。これは近い将来、学部入試にスピーキングテストを導入することを想定して生徒の準備を促すとともに、円滑な高大接続のあり方を模索する試みでもあった。
- (3)上記(1)のCBT方式および(2)のビデオフォン方式のテストの安定的運営と質的向上を図り、汎用性を高めるために以下の研究を行った。
  - ①大容量の回答音声データを確実に回収するシステムの構築
  - ②機器トラブルに対応するシステムの構築(トラブルシューティングマニュアルの策定)
  - ③項目反応理論(IRT)に基づくテスト項目の特性および評価尺度の信頼性検証および評価観点ごとの尺度の信頼性・妥当性を検証することによる評価観点の最適化
  - ④構成概念の精緻化、テストの妥当性検証
  - ⑤採点の品質向上(採点者訓練の充実、継続的な採点者評価システムの構築)
  - ⑥採点者の負担軽減(受験者規模に応じて評価観点の取捨選択を行うシステムの構築)
  - ⑦等化の方法論的検討・項目バンク構築
  - ⑧望まれる波及効果を得るための方法論的検討(事前説明、教育実践との連携、フィードバック等の改善)
- (4)上記(1)～(3)の実績に基づいて、学校や大学が入学試験や定期考査等において、目的やニーズに適ったスピーキングテストを開発・実施するためのガイドラインを策定した。また、モデルの規模を拡大して、「大学入学共通テスト」において英語スピーキングテストを実施することを想定し、目標達成に向けた具体的な課題を明らかにし、解決法を提案した。

#### 4. 研究成果

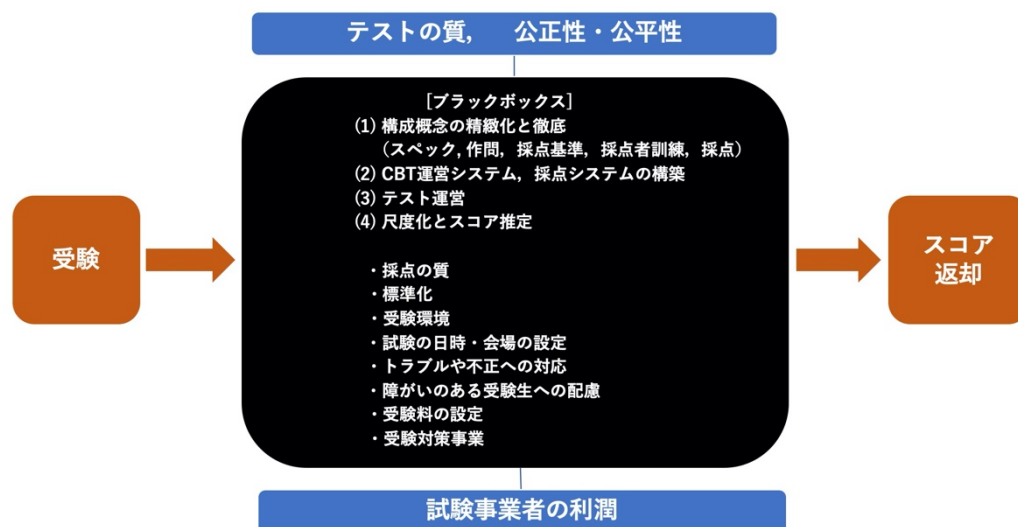
本研究を開始して間もなく、2021年度入試から「大学入試センター試験」に代わって導入される「大学入学共通テスト」では、英語4技能(特にスピーキング能力)を評価するために、複数の英語民間試験が使われることが決まった。しかし、導入に向けて拙速かつ場当たりに準備が進められる過程で、新制度には多数の深刻な問題があることが発覚し、最終的には新制度開始の5ヶ月前になって導入延期が決まった。本研究の最も顕著な成果は、通常、民間試験ではブラックボックスになっている受験から成績返却までのプロセス(作問、問題配信・音声回答回収、採点、等化・標準化、トラブル対応、費用等)を透明化(公開)することにより、新制度の設計には構造的な欠陥があり、入試に求められる公正性・公平性が担保できないことを実証データに基づいて訴えることができたことと言える。

具体的には、書籍の出版や国内外の学会における論文や口頭の発表だけでなく、広く一般に読まれる雑誌への投稿や50を超える新聞・雑誌の記事への情報提供を通して、研究チームのメンバーがそれぞれに英語教育、情報科学、統計心理学などの多角的な側面から、英語スピーキングテストの開発・運営の実態・実情に関する情報を発信した。また、研究代表者は、第200回国会の衆議院文部科学委員会(2019.11.5)に参考人として招致されて意見陳述をしたり、文部科学省「大学入試のあり方に関する検討会議」第10回の有識者ヒヤリング(2020.6.26)に出席し、本研究の成果を踏まえて、今後の大学入試(英語)のあり方について意見を述べたりした。

CBT方式やビデオフォン方式のスピーキングテストを開発・運営し、入試や定期考査に導入するための指針を策定した実績に基づいて、本研究チームが大学入試への英語スピーキングテスト導入について提言できるのは以下の8点である。

- (1)下図で示すように、テストの品質維持・向上、公正・公平な試験運営と民間試験事業者の利潤との間には必然的なトレードオフがあるので、固定数の(今後は必然的に減少する)受験生を複数の事業者に奪い合わせる形で民間試験を利用すると、ステークホルダー(受験生、保護者、教員等)の納得感を得られる入学者選抜ができない。その結果、制度の維持が困難になることが予想される。

◆ テストの質や公正性・公平性と試験事業者の利潤の間にはトレードオフがある。  
特にスピーキングテストは危うい。→ 入試を安易に民間に託す前に熟慮を！



- (2) 開発・運営にかかる費用と手間、採点に要する時間等を考慮すると、個々の大学が単独で入試(たとえば個別試験)にスピーキングテストを導入することは、経験豊富な事業者の協力を無償あるいは安価に得られる等の特例を除いては、不可能と考えられる。したがって、共通テストへの民間試験導入を積極的に推進してきた政治家や教育者の「今後は各大学に4技能入試の実施を求めるべきだ」という意見は、「民間試験を使え」という意見と同じと見なされる。
- (3) 長期的に考えるなら、今後のAIの発展等を視野に入れて、産学の協働で、米国のETSや英国のCambridge Assessmentのようなテストングエージェンシーを日本に作ることも可能である。受験者を奪い合うのではなく、当初から相当数の受験者を見込めるなら、技術開発への投資は容易である。また、今後、各大学が入試の作成や運営にかかる負担をどこまで負い続けられるか、それが限られた人的リソースの有効な使い方であるかを考えても、専門的なテストングエージェンシーの設立を検討する価値はある。さらに、それがテストの品質保証や良問を作る技術など、英語に限らず他科目についても、日本の入試で軽視され続けてきたことの改善にもつながる。
- (4) もし、上記(3)のようなコンソーシアム的な組織、あるいは大学入試センターのような公的機関が英語スピーキングテストを開発するなら、まず何をどこまで測りたいかを検討する必要がある。たとえば、複数の民間試験を使ってCEFRの「A1以下、A1、A2、A2以上」を識別する程度の「緩い」評価で構わないのなら、込み入ったテストシステムを作る必要はない。一方、より精密な評価をしようとするなら、その時点のAI技術の発展度合いや予算・時間等との兼ね合いを考慮して、テストのどの部分をどう妥協するかを慎重に考えなければならない。
- (5) 現状で共通テストのために、従来のセンター試験のような「一斉受験方式」のスピーキングテストシステムを構築するなら、問題配信、回答音声の回収、採点等についての技術開発が必須である。一方、民間試験と同様の「順次受験方式」のシステムを構築するなら、複数の民間試験を並行して利用するよりはるかに精密な能力評価システムが比較的容易にできる。
- (6) もし文科省が2025年度の大学入試から4技能評価を導入するのなら、教師が普通の授業を通して各生徒の能力を実感し相対化できるような状況に、指導の現場を近づけていく方法を採用すべきである。教師が目の前にいる生徒たちの能力のCEFRレベルを評価できない一方で、CEFRとスコアの対応づけをただけの(CEFRが定義する能力を測っているのではない)民間試験に基づくCEFRレベルに納得しているようでは、スピーキング能力の向上につながる指導は難しい。
- (7) これまでの「英語教育改革」は手段(民間試験の成績向上や利用推進、「英語の授業は英語で」の原則化等)が目的化してしまっており、このままでは本来の目的達成(英語運用能力向上)が困難である。真に英語運用能力の向上を図りたいなら、限られた予算や人的なリソースを足りない部分の補強(たとえばインプットを増やすためのクラス規模の縮小や指導理念を共有するための教師育成・研修制度の見直し等)に集中投下すべきである。
- (8) 2020年度英語入試改革の失敗の原因は専門知や専門家の意見を軽視したことにある。我々も本研究で得た知見を活かしてほしいと何度も文科省にアプローチしたが聞き入れられなかった。「有識者」と呼ばれる者たちが専門知を持ち寄り、現場の教師や試験を受ける生徒たちの意見を聞きながら、本気で意見を戦わせて最適解を求めるような場がどうしても必要である。今、最も求められる「改革」は、教育政策の決定プロセスの見直しである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Yumi Hato, Katsunori Kanzawa, Haruhiko Mitsunaga, Sandra Healy	4. 巻 Vol. 7
2. 論文標題 Developing a computer-based speaking test of English as a lingua franca: Preliminary results and remaining challenges	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 WASEDA Working Papers in ELF (English as a Lingua Franca)	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神澤克徳, 森真幸, 坪田康, 羽藤由美	4. 巻 NO. 37
2. 論文標題 全国学力テスト中学校英語「話すこと」調査の円滑な実施に向けた 提言：京都工芸繊維大学におけるCBTスピーキングテスト開発・運営の実績を踏まえて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都工芸繊維大学情報科学センター広報誌	6. 最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 羽藤由美	4. 巻 2019年10月号 (Vol. 89, No. 10)
2. 論文標題 国立大学は若者を犠牲にすることに加担するな 迷走を続ける英語入試改革の現状	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岩波科学	6. 最初と最後の頁 905-913
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 羽藤由美	4. 巻 2019年11月号
2. 論文標題 2020年度英語入試改革の構造的欠陥	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 指導と評価	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 羽藤由美	4. 巻 2020年4月号 (Vol. 48-6)
2. 論文標題 英語入試改革の挫折から迷走を抜け出す道を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 72-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 羽藤由美	4. 巻 2020年6月号 (Vol. 609)
2. 論文標題 言語を言語として使う スピーキング指導の基本のキ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新英語教育	6. 最初と最後の頁 7, 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 羽藤由美	4. 巻 2018年8月号
2. 論文標題 大学入試へのスピーキングテスト導入のインパクト テスト開発の実践に基づく考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 28, 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 光永悠彦, 神澤克徳, 坪田康, 羽藤由美	4. 巻 2016
2. 論文標題 大学・大学院入試に向けた英語スピーキングテストの尺度化事例 受験者特性と評価者属性を考慮したモデルによる検討	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本テスト学会第14回大会発表論文抄録集	6. 最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hideo Masuda, Masayuki Mori, Katsunori Kanzawa, Yasushi Tsubota, Yumi Hato, Yasuaki Kuroe	4. 巻 2016
2. 論文標題 Secure data management in an English speaking test implemented in general-purpose PC classrooms	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Proceedings of the 2016 ACM Annual Conference on SIGUCCS	6. 最初と最後の頁 135-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yumi Hato, Katsunori Kanzawa, Yasushi Tsubota, Haruhiko Mitsunaga, Nic Underhill	4. 巻 34/1
2. 論文標題 Developing rating scales for a CBT speaking test of English as a lingua franca	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ETAS Journal	6. 最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yumi Hato, Katsunori Kanzawa, Yasushi Tsubota, Haruhiko Mitsunaga, Nic Underhill	4. 巻 60
2. 論文標題 Developing rating scales for a CBT speaking test of English as a lingua franca	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 IATEFL TEASIG NEWSLETTER	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 羽藤由美	4. 巻 2016年12月号
2. 論文標題 定期テストから入試へ：高・大をつなぐスピーキングテスト開発の現場から	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 英語教育 (大修館書店)	6. 最初と最後の頁 36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Haruhiko Mitsunaga, Yumi Hato, Katsunori Kanzawa
2. 発表標題 Developing English Speaking Proficiency Scale Using Common Subject Design
3. 学会等名 Pacific Rim Objective Measurement Symposium (PROMS) 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 光永悠彦, 羽藤由美, 神澤克徳
2. 発表標題 第三の評価者が多相ラッシュモデルのパラメタ推定に及ぼす効果の検討：英語スピーキングテストの評価データを用いて
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 羽藤由美
2. 発表標題 英語民間試験利用の問題点とは？ 「各資格・検定試験とCEFRとの対照表」の不都合な真実
3. 学会等名 地域科学研究会・高等教育情報センター主催セミナー 高等教育活性化シリーズ 382 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 羽藤由美
2. 発表標題 リンガ・フランカとして英語を使う能力を測るスピーキングテストの開発と運営 CBTとテレビ電話方式テストの実績を踏まえて
3. 学会等名 日本テスト学会第17回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 光永悠彦、羽藤由美、神澤克徳
2. 発表標題 英語スピーキングテストにおけるスコアの共通尺度化法 京都工芸繊維大学における事例から
3. 学会等名 日本テスト学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 光永悠彦、羽藤由美、神澤克徳
2. 発表標題 カテゴリの併合がパラメタ推定に及ぼす影響 パフォーマンステストデータに多相ラッシュモデルを適用した場合
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神澤克徳、森真幸、羽藤由美
2. 発表標題 インターネットが利用できるIBT英語ライティングテストの実現に向けた予備調査
3. 学会等名 日本教育工学会 2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 羽藤由美、神澤克徳、光永悠彦
2. 発表標題 大規模スピーキングテストの舞台裏、どこがどう難しいのか？ 京都工芸繊維大学の実践より
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森 真幸, 神澤 克徳
2. 発表標題 入試に利用できるCBT英語スピーキングテストの環境構築と運営
3. 学会等名 FLEXICT Expo 2018
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森 真幸, 神澤 克徳
2. 発表標題 IBT英語ライティングテストを公平・公正に実施するためのシステム環境の構築
3. 学会等名 FLEXICT Expo 2019
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 羽藤由美
2. 発表標題 2020入試改革の瓦解から学ぶべきこと
3. 学会等名 シンポジウム「これからの大学入試のあり方を考える」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 羽藤由美
2. 発表標題 大学入学共通テスト、その何が問題か
3. 学会等名 京都大学職員組合ミニ二講義(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yumi Hato, Katsunori Kanzawa, Yasushi Tsubota, Glen Edmonds, Haruhiko Mitsunaga
2. 発表標題 Assessing ELF proficiency: The evolution of a CBT speaking test
3. 学会等名 10th Anniversary Conference of English as a Lingua Franca, Helsinki, Finland (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yumi Hato, Katsunori Kanzawa, Yasushi Tsubota, Haruhiko Mitsunaga, Yuko Shimizu, Glen Edmonds
2. 発表標題 Developing a CBT speaking test of English as a lingua franca: The evolution of rating scales
3. 学会等名 JACET 56th International Convention, Tokyo, Japan (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 神澤克徳, 光永悠彦, 清水裕子, 羽藤由美
2. 発表標題 ビデオフォン (Skype) 方式英語スピーキング テストの可能性と課題: 高等学校定期考査への導入実績に基づく報告
3. 学会等名 日本語テスト学会 第21回全国研究大会 会津大学 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yumi Hato
2. 発表標題 Development of a computer-based speaking test of English as a lingua franca: Preliminary results and remaining challenges
3. 学会等名 The 7th Waseda ELF International Workshop, Tokyo, Japan (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 羽藤由美
2. 発表標題 スピーキングテストの開発・運営から見えてきたもの
3. 学会等名 東京大学高大接続研究開発センター主催シンポジウム「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yumi Hato, Katsunori Kanzawa, Haruhiko Mitsunaga, Yasushi Tsubota, Nic Underhill
2. 発表標題 Developing a CBT speaking test of English as a Lingua Franca
3. 学会等名 The 50th Annual Conference of IATEFL (International Association of Teachers of English as a Foreign Language) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 坪田康, 神澤克徳, 羽藤由美
2. 発表標題 入試導入に向けたCBT型英語スピーキングテストシステムの開発・運用: 既存の情報演習室を利用する試み
3. 学会等名 国立大学法人情報系センター協議会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 光永悠彦, 神澤克徳, 坪田康, 羽藤由美
2. 発表標題 大学・大学院入試に向けた英語スピーキングテストの尺度化事例 受験者特性と評価者属性を考慮したモデルによる検討
3. 学会等名 日本テスト学会第14回大会 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Hideo Masuda, Masayuki Mori, Katsunori Kanzawa, Yasushi Tsubota, Yumi Hato, Yasuaki Kuroe
2. 発表標題 Secure data management in an English speaking test implemented in general-purpose PC classrooms
3. 学会等名 2016 ACM Annual Conference on SIGUCCS (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 羽藤由美
2. 発表標題 第1回京都工芸繊維大学入試改革フォーラム
3. 学会等名 京都工芸繊維大学独自のCBT英語スピーキングテスト, KIT Speaking Test, English for the 21st Century の概要 リンガフランカとしての英語運用能力を測る試み
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 羽藤由美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 41-68
3. 書名 「民間試験の何が問題なのか CEFR対照表と試験選定の検証より」南風原朝和 (編) 『検証 迷走する英語入試 スピーキング導入と民間委託』	

1. 著者名 羽藤由美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 96-128
3. 書名 「英語入試改革の挫折から対案の可能性を探る」 宮本友弘 (編) 『変革期の大学入試』	

1. 著者名 羽藤由美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 「大学入試への英語スピーキングテスト導入を議論するための基礎知識」 中村高康(編)『大学入試がわかる本 改革を議論するための基礎知識』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>大学入試への英語スピーキングテスト導入プロジェクト  <a href="https://kitspeakee.wordpress.com">https://kitspeakee.wordpress.com</a></p> <p>確信的に踊らされるにしても...羽藤由美のブログ  <a href="https://yumihato.wordpress.com">https://yumihato.wordpress.com</a></p> <p>2019.11.5 研究代表者が第200回国会 衆議院 文部科学委員会「文部科学行政の基本施策に関する件(高大接続改革)」に参考人として招致され意見陳述および議員からの質疑に答えた。</p> <p>2019.11.29 研究代表者が日本記者クラブにおける記者会見を行い、英語教育・入試改革のあり方に関する意見を述べた。  <a href="https://www.jnpc.or.jp/archive/conferences/35548/report">https://www.jnpc.or.jp/archive/conferences/35548/report</a></p> <p>2020.6.26 研究代表者が文部科学省「大学入試のあり方に関する検討会議」第10回の有識者ヒヤリングに出席。本研究の成果を踏まえて、今後の大学入試(英語)のあり方について意見を述べた。</p> <p>2018.4.11付日本経済新聞朝刊「英語 話す力、独自に測定 入試・教育にふさわしい内容探る」、2018.7.4付朝日新聞夕刊「(英語をたどって7:2)話せないのにテストするの?」、2019.4.30付朝日新聞朝刊「(変わる大学入試2020)英語民間試験、利用しないわけは 京都工芸繊維大・羽藤由美教授に聞く」、2019.11.19付東京新聞「公平な採点、どう担保 都立高校入試 英語スピーキングテスト試行」など、本研究の成果に基づく大学入試・高校入試への英語スピーキングテスト導入に関するメディア(新聞、雑誌、テレビ)への情報提供は50件を上回る。</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	神澤 克徳 (Kanzawa Katsunori)  (00747024)	京都工芸繊維大学・基盤科学系・助教  (14303)	
研究分担者	光永 悠彦 (Mitsunaga Haruhiko)  (70742295)	名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授  (13901)	
研究分担者	清水 裕子 (Shimizu Yuko)  (60216108)	立命館大学・食マネジメント学部・教授  (34315)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坪田 康 (Tsubota Yasushi)  (50362421)	京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授  (14303)	
研究分担者	榊田 秀夫 (Masuda Hideo)  (90304063)	京都工芸繊維大学・情報工学・人間科学系・教授  (14303)	
研究分担者	永井 孝幸 (Nagai Takayuki)  (00341074)	京都工芸繊維大学・情報工学・人間科学系・准教授  (14303)	
研究分担者	ヒーリ サンドラ (Healy Sandra)  (10460669)	京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授  (14303)	
研究分担者	竹井 智子 (Takei Tomoko)  (50340899)	京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授  (14303)	
研究分担者	山本 以和子 (Yamamoto Iwako)  (90293521)	京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授  (14303)	
研究分担者	森 真幸 (Mori Masayuki)  (90528267)	京都工芸繊維大学・情報工学・人間科学系・助教  (14303)	
研究分担者	内村 浩 (Uchimura Hiroshi)  (90379074)	京都工芸繊維大学・アドミッションセンター・教授  (14303)	削除：平成29年3月31日退職

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	伊藤 薫  (Ito Kaoru)  (30769394)	京都工芸繊維大学・KIT男女共同参画推進センター・研究支援 員     (14303)	削除：平成28年10月28日